【研究ノート】西海の鏡

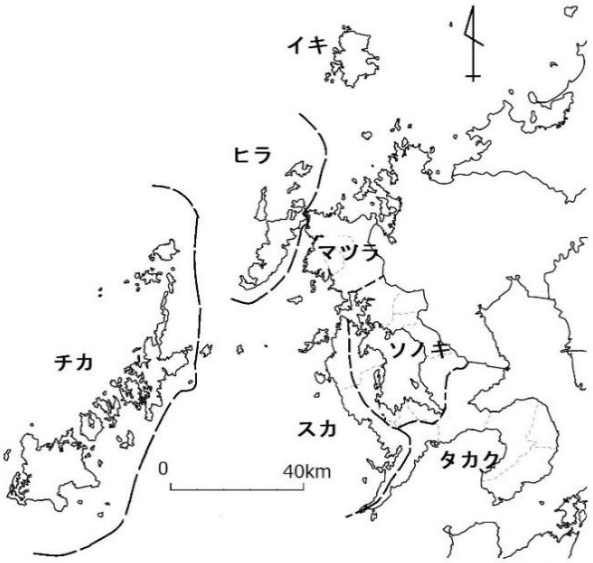
古門 雅高

はじめに

わが国の弥生時代と古墳時代に為政者が好んで鏡を入手したことはよく知られており、彼らが入手した鏡は配下の有力者に分配され、両者の結びつきを強めるとともに、序列化を促進する役割を果たしてきた（下垣 2022）。

このような鏡を好む文化の周縁部に位置する長崎県本土部の当時の社会状況を明らかにすることが本稿の目的である。

さらに本県本土部では 2011（平成 23）年から 2017（平成 29）年にかけて西九州新幹線建設に伴う緊急発掘調査が行われ、新たな鏡が出土したので、最近の発掘調査で出土した鏡を集成することも本稿の目的とした。集成の結果、鏡の分布から当時の外海航海ルートが浮かび上がるという成果も得られた。



第 1 図　長崎県本土部の地域区分

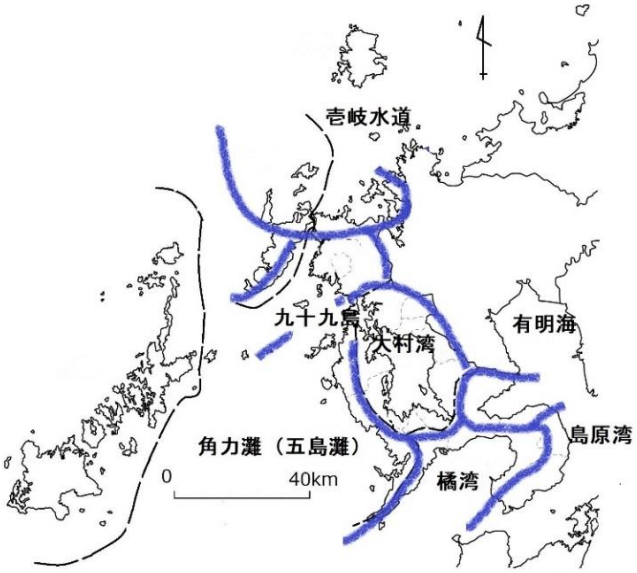
なお、鏡の型式や年代および特徴などは先学の研究成果に依っている。特に 2016（平成 28）年に刊行された下垣仁志による鏡の全国集成に負う所が大きい（下垣 2016）。本稿では同集成を「下垣集成」と呼ぶ。

また、標題の「西海」は長崎県本土部に平戸諸島と五島列島を加えた地域を想定している。

1　本県本土部の地域区分

本稿では本県本土部を律令制下の地域名を参考に 6 地域に分けた。北からマツラ（松浦）、ヒラ（比羅）、ソノキ（彼杵）、タカク（高来）、チカ（値嘉）、スカ（周賀）の各地域である（第 1 図）。

現在の市町名に反映させると「マツラ」が松浦市、「ヒラ」は平戸市、「ソノキ」は大村市と東彼杵町、川棚町、そして長崎市と西海市のそれぞれ東部を含



第 2 図　長崎県本土部の小地域区分

む。「タカク」は旧多良見町を除く諫早市、雲仙市、島原市、南島原市が該当する。「スカ」は長崎市西部と西海市西部、「チカ」は五島市、新上五島町、小値賀町の各行政範囲とした。

また、前述の各地域をさらに分割して小地域を設定する場合は、それぞれの小地域が接する海域名を冠して小地域名とした。マツラは壱岐水道沿岸地域と九十九島沿岸地域に分割し、ソノキは大村湾東岸と同西岸の地域に、タカクは有明海沿岸、島原湾沿岸、橘湾沿岸の各地域にそれぞれ分けた（第 2 図）。周囲を海に囲まれた本県では当然のことながら生活を海に依存するため、原始古代における地域区分は海域ごとに分けた方が有意義な結論を導けると考えた。

２　長崎県本土部の鏡の研究史

本県の鏡の出土数は決して少ないわけではない。下垣仁志が集成した結果によると本県における弥生時代と古墳時代の鏡の出土数は 92 面で、全国で 23 位である（下垣 2022）。弥生時代に限っては 55 面で、福岡県・佐賀県・熊本県に次ぐ全国 4 位の出土量である（西日本新聞 2022 年 1 月 20 日付）。ところが本県出土の鏡の内訳をみると全体の約 7 割は壱岐・対馬で出土しており、本土部の出土数は極めて少ない。したがって、これまで本県本土部の鏡は集成こそされるものの、ほとんど検討されることなく今日に至っている。

当地の鏡の集成作業は岡崎 敬が 1974（昭和 49）年と 1976（昭和 51）年に公表したものが嚆矢である（岡崎 1974、1976）。その後、町田利幸が雲仙市の大屋敷遺跡の報告に際し集成している（長崎県教委編 1989）。

さらに国立歴史民俗博物館が 1994（平成 6）年に実施した全国集成の中で藤田和裕が長崎県を担当して集成している（藤田 1994）。2002（平成 14）年には同集成の追加が行われ、本県を宮﨑貴夫が担当した（宮﨑 2002）。その後西九州自動車道の発掘調査時に半田 章が集成を行い（半田 2010）、西九州新幹線建設に伴う発掘調査では中川潤次が集成している（中川 2018）。しかし鏡の検討となると管見では宮﨑貴夫の概観的な仕事が唯一であろうと思われる（宮﨑 2019）。

３　鏡式

辻田淳一郎によると弥生時代から古墳時代にかけて日本列島で出土する鏡は大きく分けて、①朝鮮半島鏡（多鈕細文鏡）②中国鏡（前漢鏡・後漢鏡・三国西晋鏡・南北朝鏡）③三角縁神獣鏡④倭製鏡（弥生小形倭製鏡・古墳時代前期倭製鏡・古墳時代中後期倭製鏡）があるという（辻田 2019）。

以下、辻田の分類に従って本県本土部から出土した鏡を概観する。ただし三角縁神獣鏡ならびに古墳時代中後期倭製鏡は本県では出土例がないため割愛する。

また、漢鏡は岡村秀典による編年に拠り（岡村 1984, 1993）、古墳時代の倭製鏡は森下章司の編年に拠った（森下 1991）。

（１）朝鮮半島鏡（多鈕細文鏡）（第 5 図 1）

多鈕細文鏡は本県では唯一平戸市の里田原遺跡（第 3 図 1）から出土している。同鏡は平成 12(2000)年、里田原遺跡の東南端にある通称「荻の下地区弥生墓地」44C 地点で発見されている。橋口編年ＫⅡａの大形成人用甕棺（単棺）に、小形壺(城ノ越式)と共に副葬されていたもので、半円形断面の鏡縁(蒲鉾縁)をなし、背面に三つの鈕をもつ完形鏡である（第 5 図 1）（田平町教委編 2003）。多鈕細文鏡は全国で 12 面の出土例しかなく（註 1)、本鏡のように３つの鈕を持つ型式の鏡は、佐賀県佐賀市の増田遺跡の中形成人用甕棺と山口県下関市の梶栗浜遺跡の石棺からそれぞれ出土している

（辻田 2019）。本県本土部で大形成人用甕棺に舶載鏡が副葬されるという事例は里田原遺跡が唯一であり、大変貴重な資料である（註 2）。

（２）中国鏡（前漢鏡）

①異体字銘帯鏡ないし方格規矩鏡

大村市立小路（たてしょうじ）遺跡（第 4 図 15）の 4 区第 3 層からは異体字銘帯鏡ないし方格規矩鏡片が出土している（第 5 図 2）（長崎県教委編 2018）。発掘調査報告書によると九州大学の辻田淳一郎先生のご教示として「前漢末の舶載鏡の破鏡片である。両面とも本来の調整や文様などが見えなくなるまで研磨しており、鏡面に穿孔を施す。異体字銘帯鏡か方格規矩鏡の可能性がある」という（長崎県教委編 前掲 p48）。

また、西九州自動車道の建設に伴い発掘調査された佐世保市門前遺跡（第 4 図 4）の B-10-19 区第 4 層からも異体字銘帯鏡片が出土している（第 5 図 3）（長崎県教委編 2006）。破鏡かどうかは未報告であったが、今回筆者が実見した限り、顕著な加工痕や研磨痕跡は見られないものの、全体的に手ずれによる摩耗が確認できるので、破鏡と判断した。なお、発掘調査報告書では「内行花文鏡」とされているが、下垣集成では「複波文縁 方格規矩鏡？」「非破鏡？」と記載されている（下垣 2016）。

②虺龍文（きりゅうもん）鏡か内行花文鏡

諫早市上原（うわばる）遺跡（第 4 図 9）では古墳時代初頭の 2 号竪穴建物跡の周壁の上端から虺龍文（きりゅうもん）鏡か内行花文鏡片（註 3）が出土している（第 5 図 4）（諫早市教委編 2007）。発掘担当者は故意に割られていること、割れ口に手ずれの痕跡があることなどから破鏡と認定するとともに、竪穴建物外からの流れ込みの遺物と理解している。下垣集成には未掲載である。

（３）中国鏡（後漢鏡）

①方格規矩鏡

ここに取り挙げた鏡は、いずれも外区片か破鏡であるため，鏡式が方格規矩鏡のみに限定できるかどうか難しいところである。ここでは方格規矩鏡の可能性が高い資料として扱う。

以下、概要を記す。

弥生時代中期初頭に多鈕細文鏡が出土して注目された平戸市里田原遺跡（第 4 図 2）では、同後期に方格規矩鏡片が出土している（第 5 図 5）。同鏡は平成 13（2001）年の 9 月 10 日から 10 月 1 日にかけて行われた同遺跡の第 47 次調査で包含層から出土しており、出土地の地番は里免 1233-1 である（註 4）。同鏡には穿孔が認められるので、破鏡であることが分かる（註 5）。未報告のため下垣集成には掲載されていない。

さらに西九州自動車道の発掘調査でも佐世保市武辺城跡（第 4 図 5）から方格規矩鏡片が出土している（第 5 図 6）（佐世保文化財調査事務所編 2010）。出土したのは平成 18（2006）年度に調査された G 区で，発掘調査報告書によると「同区は近・現代において造成されており，岩盤には重機による掘削の痕跡が見られた。」（佐世保文化財調査事務所編前掲　p. 39）との記述があり、同鏡は造成地への流れ込みと推測される。破鏡かどうかは未報告であったが、筆者が実見した限り、外区と内区外周間にある段の斜面が研磨され、光沢があるため、破鏡と判断した。正規の調査報告書刊行後に追加報告の形で公表されたためか、下垣集成には未掲載である。

東彼杵町白井川遺跡（第 4 図 6）では F-3 区第 3 層から方格規矩鏡片が出土している（第 5 図 7）（東彼杵町教委 1990）。破鏡かどうかは未報告であったが、筆者が実見した限り、顕著な手ずれや研磨痕、加工痕は確認できなかった。破砕されてさほど時間を置くことなく廃棄されたと判断した。本

稿では破鏡として取り扱う。下垣集成では「方格規矩鏡 or 獣帯鏡」と記されている（下垣 2016）。
②上方作系浮彫式獣帯鏡（じょうほうさく けい うきぼりしき じゅうたいきょう）
同鏡は平戸市田助遺跡の田助古墳（第 4 図 1）から出土している（京都大学平戸学術調査団編 1951）（第 5 図 8）。完形鏡か破砕鏡か判断がつきかねる。発見は 1928（昭和 3）年で、1950（昭和 25）年に京都大学が調査した石棺墓に隣接していたらしいが、詳細は不明である。古墳と称されているものの、共同墓地を構成する他の墳墓からみて実際は石棺であった可能性が高い。筆者はかつて同古墳の時期を弥生時代終末から古墳時代前期と幅広に設定したことがある（古門 2022）。
③細線式獣帯鏡
大村市竹松遺跡（第 4 図 8）の TAK201303B1 区 SC123（SC は竪穴建物跡 筆者註）の床面から 20 ㎝上の覆土より細線式獣帯鏡片が出土している（第 5 図 10）。発掘調査報告書には辻田先生による破断面細部観察による所見として「一部に磨れた痕でやや光沢がある所、僅かな削り痕が観察できたことから鏡片ではなく破鏡」と記載されている（新幹線文化財調査事務所編 2018 p. 331）。西九州新幹線建設に伴う発掘調査によって出土した鏡は下垣集成後の報告であるため、同集成には未掲載である。
④内行花文鏡
平戸市田助遺跡の田助古墳（第 4 図 1）から前述の②上方作系浮彫式獣帯鏡と伴に内行花文鏡片が出土している（第 5 図 11）。破鏡かどうかは本鏡が所在不明のため確認できない。
さらに松浦市栢ノ木（かやのき）遺跡（第 4 図 3）では弥生時代の共同墓地に営まれた 2 号石棺より内行花文鏡が出土している（第 5 図 12）（正林編 1973）。完形鏡であったのか破砕鏡であったのか判然としないが、報告書の「東端棺床に表面研磨された板石をおき青銅鏡片が発見され，微粒礫敷設の棺床面東北端の青銅鏡片と本来同一個体である。」（正林編 前掲 P. 9）という記述より、筆者は本鏡が破砕され、棺内に散布された可能性が高いと考え、2 号石棺の時期を弥生時代後期と認識している。
また、古墳時代初頭の大村市冷泉（れいせん）遺跡（第 4 図 7）の第 3 号石棺付近から内行花文鏡片が出土している（大村市教委編 2003）（第 6 図 13）。同鏡は穿孔があるため、破鏡である。下垣集成では「鏡式不明」とされている（下垣 2016）。したがって内行花文鏡の可能性はあるものの断定できない資料である。
平戸市の勝負田（しょうぶた）古墳（第 8 図 1）より長宜子孫内行花文鏡が出土している（第 6 図 14）。完形鏡か、あるいは破砕鏡かという問題は、本鏡が所在不明であることも手伝って確認できない（京都大学平戸学術調査団 1951）。同古墳と鏡についてはかつて筆者も検討したことがある（古門 2022）。出土状況は昭和 16、17 年頃の不時発見であり、不明な点が多い。筆者は 4 世紀後半から 5 世紀初頭頃の墳墓と考えている。
⑤（斜縁）四獣鏡
長崎市万才町遺跡（第 8 図 8）より完形鏡が出土している（第 6 図 21）（長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996、長崎市史編さん委員会 2013）。調査区の最下層より地山に貼り付いた状態で出土した。同鏡は 1996（平成 8）年の長崎市の発掘調査報告書では「三角縁四獣鏡」で倭製鏡と報告されていたが、2013（平成 25）年の『新長崎市史』では「斜縁四獣鏡」と訂正されている。しかし倭製鏡という評価はそのままであった。下垣集成では長崎市の認定とは異なり、舶載鏡で鏡式は浮彫式獣帯鏡と記載されている（下垣 2016）（註 6）。本鏡については舶載鏡か倭製鏡かの別と、さらには鏡式を含めて再検討が必要である。

⑥万才町遺跡出土鏡片

前述した⑤（斜縁）四獣鏡を出土した長崎市万才町（まんざいまち）遺跡（第4図14）では鏡片がD.E-4・5区のSD7から出土している(SDは溝跡　筆者註)（第5図9)。破鏡である（註7)。県教委の発掘調査報告書では「獣文帯をもつ舶載鏡である。緑青と鉄錆のため内区文様は明確ではない。径は推定で9.4cm，弥生時代中・後期の後漢鏡と推測される。」と記載されているが（長崎県教委編1995 p.153)、外区片のみの資料で、仮に斜縁であることが確認できたとしても，それが舶載鏡かどうかの判断が難しい資料である。下垣集成では「倭製鏡？」「鏡式不明」と整理されている（下垣2016)。本稿では従来の報告通り舶載鏡として取り扱うが、先述の（斜縁）四獣鏡とともに再検討が必要な資料である。

（4）三国西晋鏡・南北朝鏡

①方格T字鏡

雲仙市国見町の高下（こうげ）古墳（第9図1）から方格T字鏡が出土している（第6図15)（小田1979)。下垣集成では舶載鏡とされており、完形鏡である。この鏡は、同古墳の発掘調査報告書には記載がなく（国見町教委編1959)、後に小田富士雄が同氏の著作集の中で補記として報告したものである（小田 前掲)。補記によると「本報告書発刊後、さらに石室内の敷石などを除去した際に発見されたという鏡鑑一面を古田正隆氏がもらいうけて保管している。変形方格規矩鏡または方格八乳鏡と称されるもの」と報告されている（小田 前掲p.502)。徳富孔一によれば方格T字鏡には５種類が存在し、本鏡は「日韓出土の方格T字鏡」の「十二支帯鏡群」に属す（徳富2019)。同群は1990年代前半まで倭製鏡とされていたものだが、1990年代後半以降、舶載鏡で西晋鏡ないし晋（東晋）鏡と見られるようになっている（徳富2020)。しかし舶載鏡か、あるいは倭製鏡とは異なる日本列島製かという問題は今後の課題であるという（徳富2020)。

（5）弥生小形倭製鏡

大村市の竹松遺跡（第4図8）では小形内行花文鏡がTAK201302①区包含層（旧河川）から出土している（第6図16)（新幹線文化財調査事務所編2018)。完形鏡である。下垣集成後の報告であるため、同集成には記載がない。

雲仙市佃（つくだ）遺跡（第4図10）の87区SB1（SBは竪穴建物跡　筆者註 ）床面より直径約7.6㌢の内行花文鏡が出土している。完形鏡である（第6図17)（雲仙市教委編2013)（註8)。下垣集成には未掲載である。

さらに南島原市高原（たこら）遺跡（第4図11）の第2号溝より鏡片が出土している。２つの穿孔があり、破鏡と思われる（新幹線文化財調査事務所編2018)。未報告のため、下垣集成には未掲載である。

南島原市今福（いまぶく）遺跡（第4図12）では鏡式は不明ながら2面の鏡片が出土している（第6図18,19)（長崎県教委編1985)。

（6）古墳時代の倭製鏡

①四獣鏡

伝承であるが旧諫早邑（第8図5）から四獣鏡が出土している（第6図20)。完形鏡である。下垣集成では鼉龍鏡（だりゅうきょう）とされ（下垣2016)、鼉龍文の頭部などと共通するモチーフが用いられているため、鼉龍鏡との関連が深い鏡であることが分かる。

この鏡は漢学者市河寛斎（1749～1820）が執筆した『宝月楼古鏡図譜』の中に記録されている

が、杉本欣久によると同図譜は既に火災で焼失しているという。ここでは杉本の研究を引用する。「『宝月楼古鑑図譜』は十五面の拓影をまとめた一巻の図譜で、大正 15（1926）年に刊行された『寛斎先生余稿』に収められる。ただし、市河家に伝来した原本はその段階ですでに火災で焼失しており、寛斎による評釈文しか掲載されない。拓影が失われたのは残念ではあるものの、それを肉筆で写した数本が伝来しており、およその図様を知ることができる。」（杉本 2016 p. 106, 107）。

以下は杉本による同鏡の解説である。「幅広の無文縁に続けて雲菱文、二重の櫛歯文帯を巡らし、溝を切った凸圏で隔てられた内区には四乳を配し、その間に一匹ずつ獣をあしらう。獣は楕円形の体躯に尾が付き、本来の形式が忘れられてオタマジャクシのようになっている。現在の研究では中国鏡ではなく、日本の古墳時代前期とされる文様構成である。寛政 11 年（1799）に肥前の諫早村から出土したという」（杉本 前掲 p. 107）。下垣によると同類の鏡は岐阜市の 4 世紀後半に築造された円墳である龍門寺 1 号墳からも出土している（下垣 2016）（註 9）。同墳から出土した鏡は「五獣鏡」と報告されている（恩田 2012）。

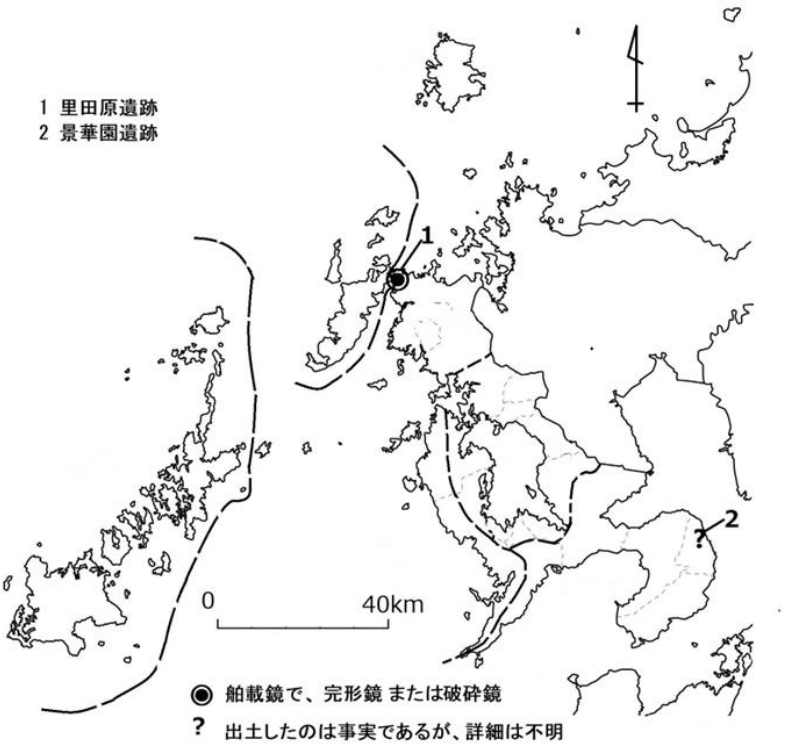
③重圏文鏡

南島原市深江町の山の寺遺跡（第 8 図 7）では重圏文鏡が表採されている（第 6 図 22）（深江町教委編 2006）。完形鏡である。

④内行花文鏡

雲仙市南串山町の遠目塚遺跡（第 8 図 6）では石棺から内行花文鏡片が出土している（第 6 図 23）（長崎県教委編 1978）。北東側の棺床から鏡片が 4 つに分散して出土した。鈕の部分が欠損し、全体の 3 分 1 程度しか残っていない。

さらに佐世保市の岩谷口（いわやぐち）第 2 岩陰（第 8 図 2）では包含層より内行花文鏡片が出土している（第 7 図 24）（片岡編 1976）。



第 3 図　弥生時代中期の鏡の分布

⑤珠文鏡A系

長崎市外海町の宮田遺跡（第8図9）のA-1号石棺内から珠文鏡が出土している（第7図25）。完形鏡である（外海町教委編1985）。

⑥鈕片

大村市竹松遺跡（第4図8）ではTAK201302⑦区旧表土から鈕片が出土している（新幹線文化財調査事務所編2018）（第7図26）。発掘調査報告書では辻田先生のご教示によると破断面があるため、破鏡と考えられるとのことである。「鈕孔形態は長方形で、底辺が鈕座面に接することから考えて古墳時代初頭～前半頃の小形倭製鏡の鈕区の破鏡である可能性が高い。」と記されている（新幹線文化財調査事務所編　前掲p.331）（註10）。本稿では古墳時代初頭の時期を採用した。

⑦捩文鏡

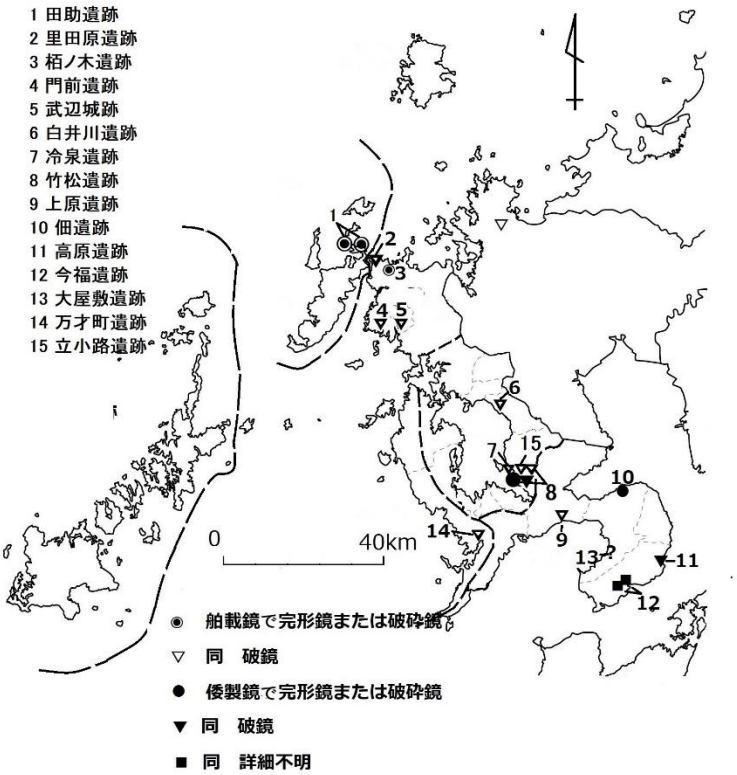
東彼杵町のひさご塚古墳（第8図4）第2号主体部内から捩文（ねじもん）鏡が出土している（東彼杵町教編1994、宮﨑編2019）。完形鏡である（第7図27）（註11）。

⑧変形四獣鏡

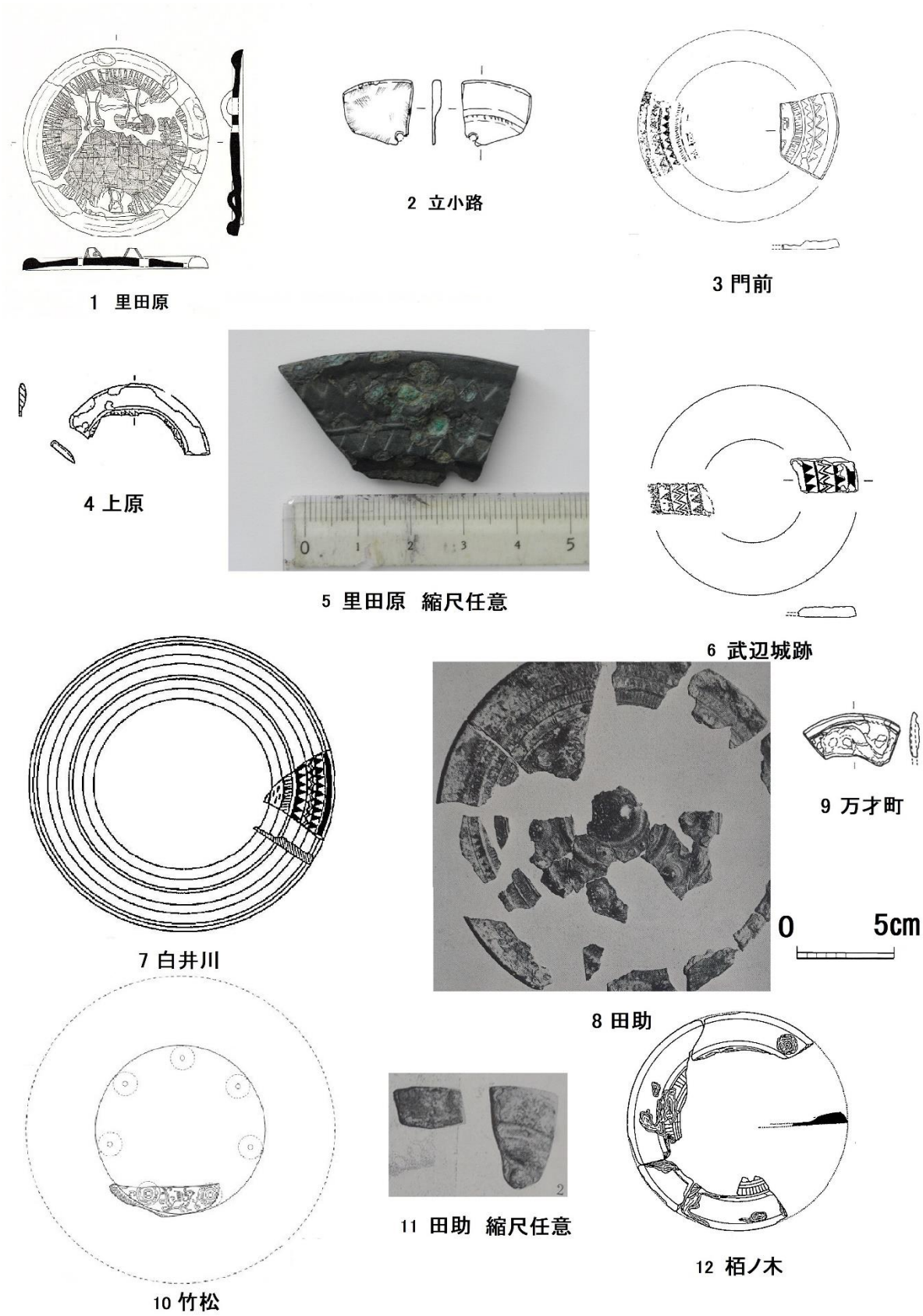
佐世保市の鬼塚古墳（第8図3）からは変形四獣鏡が出土している。完形鏡である（第7図28）。下垣集成では「四獣鏡」と記載されている（下垣2016）。石室の南西部で鏡面を上に向けた状態で出土している（佐世保市教委編2019）。

⑨素文鏡

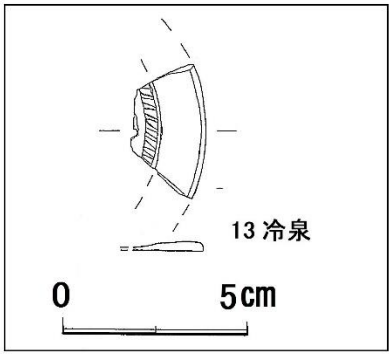
長崎市万才町遺跡（第8図8）からは素文鏡も出土している（第7図29）。B-５区第7層から出土しており、完形鏡である（長崎県教委編1995）。



第4図　弥生時代後期から古墳時代初頭の鏡の分布



第５図 長崎県本土部出土の鏡①(5,11:縮尺任意、その他:S=1/3)

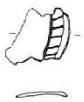


14 勝負田

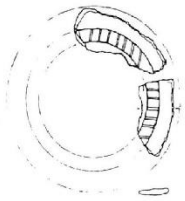
15 高下古墳

16 竹松

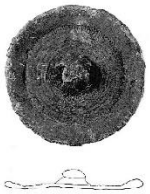
17 佃



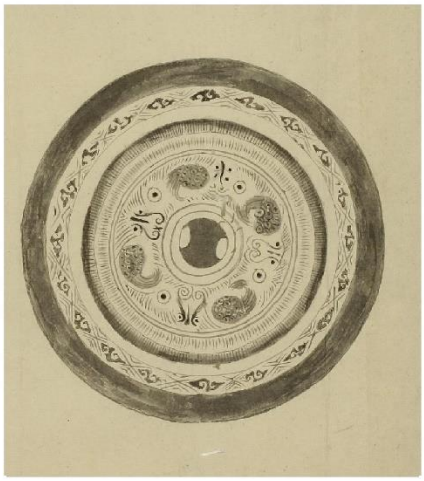
18 今福



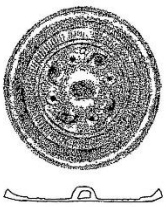
19 今福



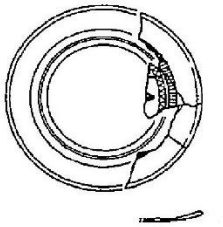
22 山の寺



20 伝諫早村



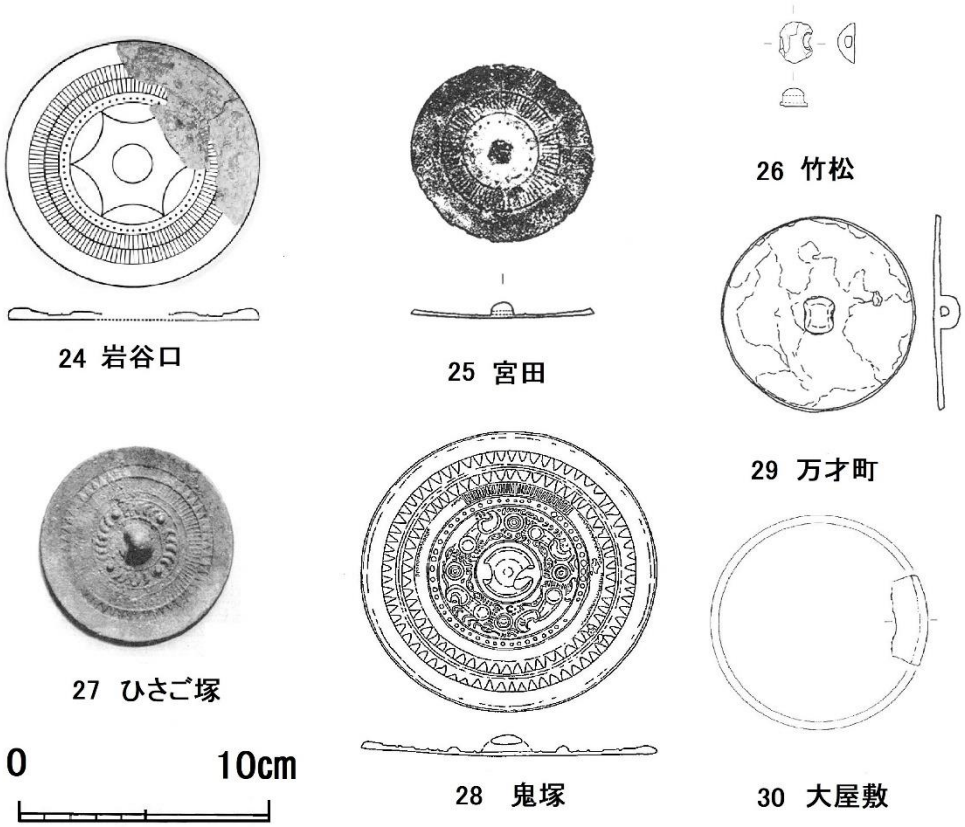
21 万才町



23 遠目塚

0 10cm

第６図 長崎県本土部出土の鏡②(13:S=1/2 その他:S=1/3)



第７図 長崎県本土部出土の鏡③(S=1/3)

（７）鏡式不明鏡

雲仙市の大屋敷遺跡（第４図 13）から鏡片が出土しているが（第７図 30）（長崎県教委編 1989)、鏡式や舶載鏡か倭製鏡かなど詳細は不明である。

（８）不明鏡

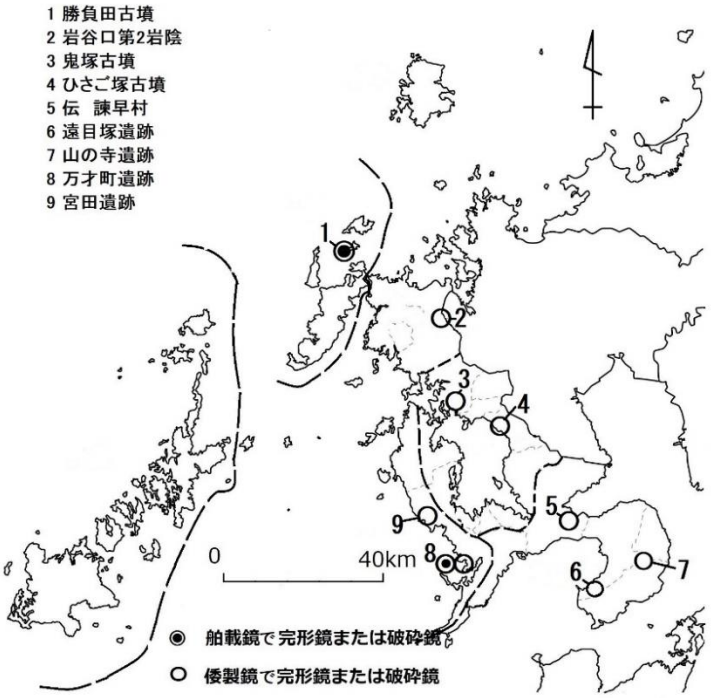
本稿では詳細不明で、実物も行方が分からない鏡を不明鏡とした。諫早市飯盛町の飯盛鬼塚古墳（第９図２）では伝承ながら倭製鏡が出土している。同古墳は 1991（平成 11）年に長崎県教育委員会により発掘調査が行われているが、報告書中には鏡の記載が無い（飯盛町教委編 2000）

また、時津町の前島古墳群（第９図３）より鏡が出土している（時津町教委編 1991)。1991 年の発掘調査による報告書には「昭和 22 年（1947 年　筆者註）の直後であったこともあり、詳しい内容等についての記録は残されていない。破壊を受けた古墳は ２基で、鉄剣・須恵器などが確認され仿製鏡の出土も伝えられているが、一部は個人で所蔵され、また残りの遺物が時津北小学校に保管されていたが、それら以外のものは所在が明確ではない。」と記されている（時津町教委編　前掲 p. 1)。その他にも長崎県の本土部から出土したものの記録が無く、現物が行方不明になっているなどの鏡を以下に掲載する。2 地域 6 遺跡である。

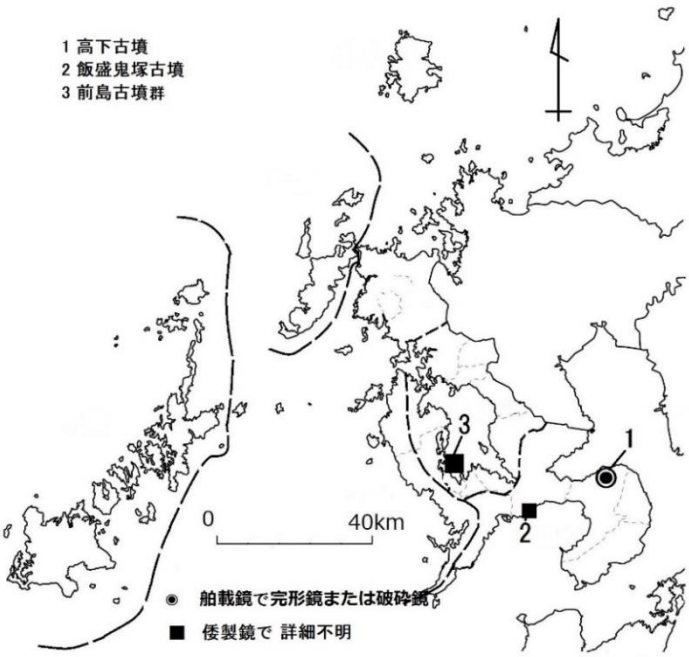
①マツラの不明鏡

・伝　白土遺跡　松浦市（旧　福島町）

②タカクの不明鏡



第 8 図　古墳時代前期から中期の鏡の分布



第 9 図　古墳時代後期の鏡の分布

第1表　長崎県本土出土鏡一覧

地域	No	図版No	出土遺跡	舶倭	時期	面径	鏡式	出土地名	遺跡内容	文献
マツラ・ヒラ	1	5-1	里田原遺跡	舶	弥生中期初頭	9	多鈕細文鏡(完形鏡)	平戸市田平町里免	甕棺	1
	2	5-11	田助古墳	舶	弥生終末から古墳前期	—	内行花文鏡	平戸市	箱式石棺	2
	3	5-8	田助古墳	舶	弥生終末から古墳前期	17	上方作系浮彫式 獣帯鏡	平戸市	箱式石棺	2
	4	5-5	里田原遺跡	舶	弥生後期	—	方格規矩鏡(破鏡)	平戸市田平町里免	遺物包含層	—
	5	5-12	栢ノ木2号墳	舶	弥生後期	10.4	内行花文鏡	松浦市志佐町栢ノ木免小久保	箱式石棺(2号石棺)	3
	6	6-14	勝負田古墳	舶	古墳前期後半から中期	13.8	長宜子孫内行花文鏡	平戸市大島町	箱式石棺？	2
	7	7-24	岩谷口岩陰遺跡	倭	古墳前期から中期	9.8	内行花文鏡	佐世保市世知原町	1区第3層	27
	8	-	*白土遺跡(伝)*	*？*	*不明*	—	*不明*	*松浦市福島町*	*不明*	
ソノキ	9	5-3	門前遺跡	舶	弥生後期	10	方格規矩鏡？(破鏡？)	佐世保市	遺物包含層	4
	10	5-6	武辺城跡	舶	弥生後期	10	方格規矩鏡(破鏡？)	佐世保市宮津	遺物包含層	5
	11	5-7	白井川遺跡	舶	弥生後期	15	方格規矩鏡ないし獣帯鏡(破鏡？)	東彼杵町	遺物包含層	6
	12	5-10	竹松遺跡	舶	弥生後期	15.5～16.5	細線式獣帯鏡(破鏡)	大村市	竪穴建物床面20cm上の覆土	9
	13	5-2	立小路遺跡	舶	弥生後期	—	異体字銘帯鏡ないし方格規矩鏡片(破鏡)	大村市	4区3層	8
	14	6-16	竹松遺跡	倭	弥生後期	7.4	内行花文鏡(完形鏡)	大村市	TAK201302①区包含層(旧河川)	9
	15	6-13	冷泉遺跡3号石棺	舶	古墳初頭	—	内行花文鏡(破鏡)	大村市今富町	箱式石棺　3号石棺付近	7
	16	7-26	竹松遺跡	倭	古墳初頭～前期	—	鈕片(破鏡)	大村市	TAK201302⑦区旧表土	9
	17	7-28	鬼塚古墳	倭	古墳中期	11.5	四獣鏡(完形鏡)	佐世保市宮津	竪穴系横口式石室	10
	18	7-27	ひさご塚古墳第2主体部	倭	古墳中期	7.4	捩文鏡(完形鏡)	東彼杵町	石棺系横口式石室	11
	19	-	前島1号墳	倭	古墳後期	9.5	不明	西彼杵郡時津町	円墳・横穴式石室	12
タカク	20	-	景華園遺跡甕棺(伝)	？	弥生中期	—	不明	島原市中野町高城元(伝)	標石墓・甕棺	13
	21	6-18	今福遺跡B－3・4区 1号溝	倭	弥生後期	7.5	不明	南島原市北有馬町	溝	20
	22	6-19	今福遺跡B－3・4区 1号溝	倭	弥生後期	7.8	不明	南島原市北有馬町	溝	20
	23	-	高原遺跡	倭	弥生後期	—	破鏡	南島原市有家町	溝	—
	24	6-17	佃遺跡	倭	弥生後期	7.6	内行花文鏡(完形鏡)	雲仙市国見町	住居跡	21
	25	7-30	大屋敷遺跡	？	弥生後期？	8.6	不明	雲仙市小浜町山 畑大屋敷上中谷	包含層(第2層)	16
	26	5-4	上原遺跡(有喜)	舶	古墳初頭	—	鳰龍文鏡か内行花文鏡(破鏡)	諫早市有喜	竪穴住居周壁上端	15
	27	6-22	山の寺遺跡	倭	古墳前期から中期	5.8	重圏文鏡(完形鏡)	南島原市深江町	表採	17
	28	6-20	諫早邑(伝)	倭	古墳前期	15.8	鼉龍鏡(完形鏡)	諫早市	伝承	18
	29	6-23	遠目塚1号石棺	倭	古墳中期から中期	8.3	内行花文鏡	雲仙市南串山町	箱式石棺	19
	30	6-15	高下古墳	舶	古墳後期	8.6	方格T字鏡(完形鏡)	雲仙市国見町多比良字岩名丁	横穴式石室	22.23
	31	-	*飯盛鬼塚古墳*	*？*	*古墳前期～中期？*	—	*不明*	*諫早市飯盛町*	*不明*	
	32	-	*塚田(伝)遺跡*	*？*	*和鏡？*	—	*不明*	*南島原市北有馬町*	*墳墓*	
	33	-	*山ノ内遺跡(伝)*	*？*	*不明*	—	*不明*	*南島原市有家町*	*不明*	
	34	-	*蒲河鬼塚古墳(伝)*	*？*	*不明*	—	*不明*	*南島原市有家町蒲河*	*不明*	
	35	-	*下釜墳墓群*	*？*	*不明*	—	*不明*	*諫早市飯盛町*	*墳墓*	
スカ	36	5-9	万才町遺跡	倭？	弥生後期から古墳初頭	—	(破鏡)	長崎市		25
	37	6-21	万才町遺跡	舶？	古墳前期から中期	6.4	(斜縁)四獣鏡　完形鏡	長崎市		24
	38	7-29	万才町遺跡	倭	古墳前期から中期	7.4	素文鏡(完形鏡)	長崎市		25
	39	7-25	宮田A－1号石棺	倭	古墳前期から中期	6.8	珠文鏡(完形鏡)	長崎市下黒崎町	箱式石棺	26

凡例

	舶載鏡
斜文字	不明鏡

・景華園遺跡　島原市
・山ノ内遺跡　島原市（旧有明町）
・伝　鬼塚古墳　南島原市（旧有家町）通称：蒲河鬼塚古墳、
・塚田遺跡　南島原市（旧北有馬町）
・下釜石棺群　諫早市飯盛町

4　長崎県本土部出土の鏡について

本県本土部の弥生時代から古墳時代に出土した鏡の集成結果を第１表に整理した。ここからは同表をもとに本県本土部で出土した弥生時代中期から古墳時代後期の鏡の数ならびに舶載鏡か倭製鏡か

の種別、さらに鏡の分布に関して地域ごとに検討する。

（1）鏡の出土数

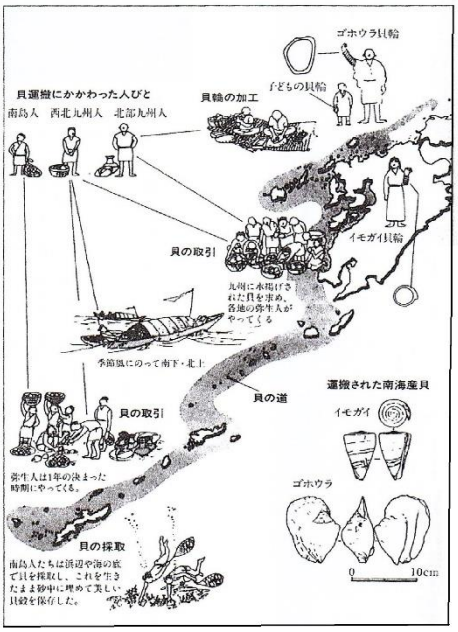
本県本土部の弥生時代中期の鏡の出土はきわめて少なく、わずか２面である。しかし弥生時代後期以降は鏡の出土が増加し、古墳時代後期にかけての鏡の出土数は、マツラで８面、ソノキで11面、タカクで16面、スカで４面である。ほとんどの地域で古墳時代より弥生時代の方が多い傾向にあるが、その原因は弥生時代終末から古墳時代初頭の時期に破鏡が多く出土することによるものと考えられる。しかし、スカの地域だけは例外で古墳時代初頭以前の鏡の出土はわずか１面であったが、古墳時代前期から中期までに３面が出土しており注目される。

また、後述するようにタカクの鏡は、そのほとんどが倭製鏡かその破鏡であるが、鏡の出土量は他地域より多いことから、この地域特有の事情が反映していると思われる。

（2）鏡の種別

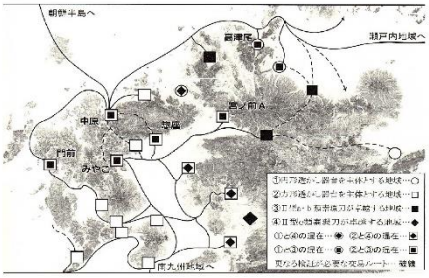
次に出土した鏡を舶載鏡と倭製鏡という種別から見ていくと、マツラやヒラでは出土鏡のほとんどが舶載鏡であることが注目される。それに対してソノキでは両者がほぼ同数であるものの、弥生時代に限れば隣接するマツラと同様に舶載鏡が多い。しかし古墳時代になると倭製鏡が主体となっている。その原因と背景については今後の課題である。

一方、タカクとスカは弥生時代から古墳時代を通じて舶載鏡が極めて少なく、倭製鏡が多い。特にタカクから出土する弥生時代後期から古墳時代中期までの鏡は上原遺跡（第４図９）出土の鏡以外は全て倭製鏡である。したがって本県本土部の舶載鏡の分布は北高南低と言える。しかし、その原因と背景についても今後の課題である。

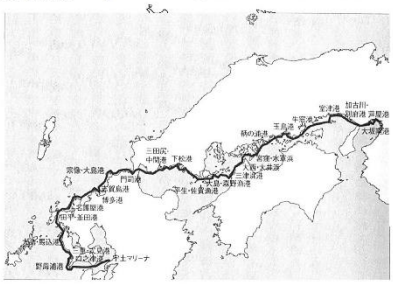


①貝の道（木下1997）

②九州島西回り沿岸ルート（小松2013）



③鉄の道（立谷2022）



④「大王の棺」航海 図 （澤宮2008）

第10図　各研究者の本県本土部西岸の航路

（3）鏡の分布

ここからは時期別、地域別に鏡の分布を見ていく。ただし、古墳時代の鏡の分布は、当地の古墳時代前期倭製鏡の半分が遺構からの出土ではないため、正確な時期決定が困難で、後の古墳時代中期と併せて検討せざるを得なかったことを断っておく。

①弥生時代中期の鏡の分布（第3図）

弥生時代中期に本県本土部で鏡が出土した遺跡は極めて少なく、前述したマツラの里田原遺跡（第3図1）とタカクの景華園遺跡（同図2）のわずか2地域2遺跡に過ぎない。筆者はこの2地域に鏡が分布する背景にはいわゆる「貝の道」のルート変更があるのではないかと考えている。

なお、島原市景華園遺跡の甕棺から出土した鏡は、かつて九州大学の岡崎 敬によって集成された「『日本における古鏡 発見地名表 九州地方Ⅰ』東アジアより見た日本古代墓制研究（増補改訂版に記載がある（岡崎1976)。ただし長崎県側の資料では、同遺跡から鏡が出土した事実は確認できるものの、現状では甕棺から出土したことを裏付ける資料が確認できない（註12)。

②弥生時代後期から古墳時代初頭の鏡の分布（第4図）

弥生時代中期にわずか2遺跡にとどまっていた本県本土部の鏡の出土は、弥生後期に増加し、分布地域も拡大する。しかし、チカ（五島列島）には前代に続き鏡は分布しないうえ、子細に見るとソノキの大村湾西岸にも分布しない。

舶載鏡のうち完形鏡ないし破砕鏡は、上方作系浮彫式獣帯鏡（第5図8）がヒラの田助遺跡(第4図1）から出土し、内行花文鏡（第5図12）がマツラの栢ノ木遺跡（第4図3）から出土するのみで、その地の地域には出土していない。極めて少数で偏在的である。

一方、舶載鏡の破鏡の方はマツラ、ソノキには出土するが、タカクには出土しない。前述のように当時のタカクは倭製鏡が主体であるため、これまた偏在的である。

③古墳時代前期から中期の鏡の分布（第8図）

この時期は前代に引き続きチカ（五島列島）とソノキの大村湾西岸には、鏡が分布しない。子細に見ると九十九島沿岸も無鏡地帯となっている。舶載鏡はヒラの勝負田古墳出土（第8図1）の長宜子孫内行花文鏡（第6図14）がある。筆者は勝負田古墳を4世紀後半から5世紀初頭の時期と見ているが、舶載鏡が前方後円墳ではなく、離島の石棺系石室に副葬されているところに本県本土部の古墳時代前期の政治社会状況を見ることができる（古門2022)。

なお、古墳時代前期から中期の倭製鏡の中で、変形四獣鏡（第7図28）を出土した鬼塚古墳（第8図3)、捩文鏡（第7図27）を出土したひさご塚古墳（第8図4)、内行花文鏡（第6図23）を出土した遠目塚遺跡（第8図6)、珠文鏡（第7図25）を出土した宮田遺跡（第8図9）はいずれも墳墓で、時期は5世紀と見られている。残りの倭製鏡は表採【山の寺遺跡（第8図7）の重圏文鏡（第6図22)】であったり、包含層出土【岩谷口第2岩陰（第8図2）の内行花文鏡（第7図24)】であったり、伝承【諫早邑（第8図5）の四獣鏡（第6図20)】であるため、鏡自体は古墳時代前期倭製鏡であるものの、遺構からの出土ではないため正確な時期決定が困難であった。したがって本県本土部の古墳時代前期および中期の鏡の分布状況を十分に検討することができなかった。たとえば本県本土部の最古の前方後円墳である守山大塚古墳はタカクに出現するが、この前方後円墳の出現と鏡の分布とがどのような関係にあるのかなど今後の課題として残った。

一方でスカの角力灘（五島灘）沿岸に複数の鏡の分布が見られ、注目された。このことは次頁で

さらに検討する。

④古墳時代後期の鏡の分布（第 9 図）

古墳時代後期の鏡の分布は古墳時代前・中期までとは大きく異なった様相を見せる。前代まで舶載鏡が分布していたヒラ、マツラからは舶載鏡どころか鏡そのものの分布が見られなくなる。さらに、これまで鏡が分布していた大村湾東岸のソノキも無鏡地帯となった。逆に、それまで鏡の分布を見なかった大村湾西岸に伝・前島古墳出土（第 9 図 3）の鏡がある。前代と異なる鏡の分布は何らかの政治的影響が背景にあると見られる。具体的には 527 年に起きた筑紫君磐井の乱が考えられよう。

また、舶載鏡とされる鏡は高下古墳出土（第 9 図 1）の方格 T 字鏡（第 6 図 15）のみであることも注目される。

５　鏡の分布から外海航海ルートの開発・整備を考える

ここまで鏡の出土数ならびに種別、さらには分布を検討してきたが、その結果、角力灘沿岸地域は古墳時代前期から中期にかけて鏡が複数出土していることが判明した。このことについて、さらに検討する。

筆者は、このような鏡の出土状況は外海航海ルートの開発・整備が反映されたものと考えている。以下、詳述する。

（１）本県本土部の航海ルートの研究史

西九州沿岸の航海ルートは、木下尚子が提唱する「貝の道」によって注目されてきた（第 10 図①）。同ルートは弥生時代前期後半から中期前半までは五島列島や西彼杵半島・長崎半島西岸を南下、北上する外海ルートが想定されており、中期後半からは有明海を経由する内海ルートに移行すると言われている（木下 1996）。移行後の貝の道について木下は大村湾東岸に存在する富の原遺跡を「貝の道」の荷下ろし港と推定しているところからみて（木下 前掲）、有明海から筑後・肥前の陸路を用いるルートとともに大村湾を経由するルートを想定していることは明らかである。

次の弥生時代後期以降は大村湾を経由する内海航海ルートと橘湾沿岸から西彼半島西岸・長崎半島西岸へ至る外海航海ルートが想定されるが、考古資料によって両ルートを検討した研究は少ないのが実情である。県内では両ルートが身近なためか、もっぱら大村湾と有明海を結ぶルート、ないし大村湾と橘湾を結ぶルートに関心が向けられてきた（註 13）。

一方、県外の研究者の学説としては、これまで小松譲や立谷聡明が内海航海ルートを、さらに宇野慎敏が外海航海ルートを復元し、提唱してきた。

小松は搬入土器や青銅鏡の分布を根拠として、唐津地域から出土する肥後系・島原半島系土器の流入経路を西回り沿岸と想定し、「九州島西回り沿岸ルート」と名付けている（小松 2013）。小松は具体的な航海ルートまでは明文化していないが、掲載された「図 245」には大村湾東岸に沿って海上に矢印が描かれており、本稿の内海航海ルートにあたることは明らかである（第 10 図②）（註 14）。

立谷聡明は西北九州の鉄製武器の出土分布を検討し、当地から大村湾を経由して有明海沿岸、筑後川流域にかけての地域間交流が、これまでの土器と併せて鉄器からも裏付けられるとして「鉄の道」との評価を与えた（第 10 図③）（立谷 2022）。

一方、外海航海ルートに関しては、これまで宇野慎敏が積極的に本県本土部の古墳時代や古墳文化に言及する中で提示してきた。特に４世紀後半からの倭王権の朝鮮半島への軍事進出に伴い、同ルートが活用されたと主張する。宇野は朝鮮半島へ渡航する船団を率いたのは有明海沿岸部の首長と見て

おり、角力灘（五島灘）沿岸や西彼半島沿岸の地域集団は、その水先案内人の役割を果たしたと推定している。その根拠として新相の布留式土器の分布などをあげている（宇野 2013）。宇野は 2005（平成 17）年に実施された「大王のひつぎ実験航海事業」に参加しており、実体験に基づき、同ルートを想定していると推定する。参考までにその際の航路図を掲載した（澤宮 2008）（第 10 図④）

（２）鏡の分布から見た航海ルート

先に述べたように本県本土部の鏡の分布から注目されることは、古墳時代前期から中期のスカの地域における複数の鏡の分布であり、筆者は外海航海ルートの開発・整備が反映された結果と考えた。すなわち、古墳時代前期後半から同中期には角力灘（五島灘）に面した西彼半島西岸や長崎半島西岸から橘湾に沿って有明海や八代海に入る外海航海ルートを整備する必要が生じたため、角力灘（五島灘）沿岸の集団にも鏡が分与されたと考える。食料や水の供給、さらには悪天候を回避したりする寄港地の整備が進められたと見られる。場合によっては水先案内人や船の漕ぎ手が必要とされたかもしれない。その原因は４世紀後半からの倭王権の朝鮮半島への軍事進出であり、そのことを受けて、倭王権や倭王権と親和的な中九州や筑後の勢力によって角力灘（五島灘）沿岸や橘湾沿岸で船着き場などの整備が進められたと推測する。

また、この外海航海ルート沿岸は古墳時代中期までは前方後円墳の空白地帯であったことにも注意が必要であろう。縄文時代より同地域はいわゆる海人の勢力範囲であり、前方後円墳が分布する内海航海ルート沿岸地域とは異なる文化領域であったはずである。にもかかわらず、倭王権ないし倭王権と親和的な中九州や筑後の勢力は外海航海ルートの整備をおし進めるために、鏡の分与を通じて当地への影響力を行使していったものと考える。

６　まとめ

本県本土部の弥生時代中期から古墳時代後期の鏡の集成を行った結果、弥生時代中期の鏡の分布は、いわゆる「貝の道」のルート変更が反映されているのではないかとの指摘を行った。

弥生時代後期から古墳時代初頭の鏡の分布は、県北部のマツラやヒラに舶載鏡が多く、県央部のソノキでは弥生時代にこそ舶載鏡が多いが、古墳時代に入ると倭製鏡が主体となっていった。一方県南部のタカクでは舶載鏡はほとんど分布せず、倭製鏡が多いことが判明した。

一方で古墳時代は倭製鏡の正確な時期を示す遺構に恵まれず、前期および中期に関してはほとんど検討できなかった。今後の課題である。

続く古墳時代後期の鏡の分布は、前代までの分布の在り方とかなり異なっており、大きな政治的変化、特に磐井の乱を想起させるものがある。

また、古墳時代前・中期にはスカの角力灘（五島灘）沿岸に鏡の分布が顕著となるため、その背景として古墳時代前期以降、それまでの大村湾を経由する内海航海ルートと併せて、本県本土部西岸を経由して橘湾や有明海・八代海に至る外海航海ルートが整備されたと推定した。その背景には倭王権の朝鮮半島への軍事進出によって外海航海ルートの重要性が高まり、寄港地の安定確保を目的に倭王権ないし倭王権と親和的な中九州や筑後の勢力が当地の集団と政治的に良好な関係を結ぶため鏡の分与を行って懐柔し、その結果角力灘（五島灘）沿岸に鏡の出土が増えたと結論付けた。

ここまで本県本土部の弥生時代中期から古墳時代後期の鏡を検討してきたが、当然ながら当時の政治状況をよく反映しているという印象を受けた。今後の研究の励みとしたい。

本稿を執筆するにあたり、小松義博、塩塚浩一、辻田淳一郎、野澤哲朗、馬場聖美、本多和典、宮﨑貴夫、山梨千晶、早稲田一美、渡邊康行の各氏にお世話になった。芳名を記し感謝申し上げる。

また、平戸市には里田原遺跡出土の鏡片の写真掲載を快諾いただいた。ご高配に感謝したい。

さらに佐世保市教委の松尾秀昭氏と東彼杵町教委の下田章吾氏には鏡片の実見でお世話になった。末筆ながらお礼申し上げる。

（2023 年 8 月 28 日　脱稿）

脱稿後、長崎市万才町遺跡出土の（斜縁）四獣鏡（第 6 図 21）の面径が 13.4 ㌢ではなく、6.4 ㌢であることが判明したので、本稿第 6 図および第 1 表に訂正を加えた。

発掘調査報告書（長崎市埋文調査協議会 1996）、下垣集成の該当部分も訂正が必要であるため、引用には注意を要する。

（2023 年 9 月 18 日）

【註】

註 1　わが国で出土した多鈕細文鏡 12 面の内訳は長崎県平戸市里田原遺跡、同県壱岐市原の辻遺跡、福岡県福岡市早良区の吉武高木遺跡、同県小郡市小郡若山遺跡（1 号）、同（2 号）、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、同県佐賀市増田遺跡、同市本村籠遺跡、山口県下関市梶栗浜遺跡、奈良県御所市名柄遺跡、大阪府柏原市大県遺跡、長野県更埴市社宮司遺跡である（辻田 2019）

註 2　多鈕細文鏡をめぐっては 2015（平成 27）年に福岡県春日市須玖南の須玖タカウタ遺跡から多鈕細文鏡系の石製鋳型の一部が出土したことにより、これまで朝鮮半島製とされてきた国内出土の多鈕鏡が国産である可能性がでてきた。しかし、同鋳型は使用された痕跡がなく、同鋳型でつくられた鏡も発見されていないため、国産の多鈕鏡は定着しなかったのではないかとの見解がある（辻田 2019）。したがって里田原遺跡の多鈕細文鏡が朝鮮半島製であるという評価は現在も変わらないと考える。

註 3　2018（平成 30）年 1 月 15 日、長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所において九州大学　辻田淳一郎先生よりご教示。

註 4　前平戸市教委　北島聖美氏よりご教示。

註 5　平戸市文化交流課　塩塚浩一氏よりご教示。なお写真提供は平戸市文化交流課による。

註 6　宮﨑貴夫氏は同鏡の下垣集成による鏡式を受けて、自身の著作集である『長崎地域の考古学研究』「日本列島最西端の古墳の動向」において、万才町遺跡出土の３面の鏡を一覧表に整理しているが、下垣が浮彫式獣帯鏡とした完形鏡を同遺跡出土の鏡片と取り違えて記載しているので、引用の際は注意が必要である（宮﨑 2019 p. 250）。

註 7　長崎県埋蔵文化財センターの寺田正剛所長より同鏡の「左側側面で断面が観察され、割れたままの状態ではなく平坦に仕上げられていることから、破鏡の可能性は高い。」とのご教示を得た。

なお、下垣集成では同遺跡から出土した３面の鏡のうち上記鏡片を「倭製鏡？型式不明」と記す一方で、浮彫式獣帯鏡は面径 13.4 ㌢の完形鏡に充てている（本稿の第 6 図 21）。同鏡は新編長崎市史では倭製鏡で斜縁四獣鏡と報告されている鏡なので、下垣集成では若干の混乱が生じているようである。

註 8　面径は雲仙市歴史資料館国見展示館の早稲田一美氏よりご教示。

註 9　下垣仁志は、著作の中で諫早邑出土と伝わる本鏡を取り上げ、古墳時代前期後葉頃に古墳が不在であった

「地域に突如として出現する古墳には、高頻度で倭製鏡が副葬されており、畿内中枢勢力が鏡の配布をつうじて広域的な政治関係を積極的に構築していた姿を復元できる。とはいえ、その面径の小ささは、評価がさほど高くなかったことを示唆する。」（下垣 2022 p.168）と本鏡が有する歴史的意義を記述している。

註 10 辻田淳一郎氏、中井歩氏（埼玉県立さきたま史跡の博物館）より御教示と記載されている（新幹線文化財調査事務所編 2018 p.331）。

註 11 同鏡の写真は宮﨑編 2019 に掲載された東彼杵町教委の下田章吾氏提供写真を引用した。

註 12 岡崎 敬氏による地名表では景華園遺跡出土鏡の文献欄に「古田正隆報」とある。宮﨑貴夫氏のご教示によると古田氏が執筆に関わった『一野遺跡概報』長崎県島原土木事務所報告 1960 年には「島原、諫早間の島原鉄道敷設工事当時多量の遺物を出土。大正初期、石棺・鏡・鉄器・土器類の出土が伝えられている。大津益雄氏の教示」との記載があるとのことであった。したがって景華園遺跡から鏡が出土したことは事実と確認できるが、甕棺から出土したことは長崎県側の資料では確認できないのが現状である。

註 13 本県の考古学関係の文献で「諫早地峡」を大村湾と有明海の通行ルートとして最初に取りあげたのは正林護である（正林 1989）。続いて稲富裕和は大村市富の原遺跡の中期末の大形成人用甕棺から出土した鉄戈は有明海を渡り、諫早市の船越を経由してもたらされたものとした（稲富 1995）。これが弥生時代の「船越」について言及した最初である。稲富の学説に示唆を受けた宮﨑貴夫は有明海から橘湾に至る通行では「愛津地峡」を通ることを示し、諫早地峡ともども渡狭ルートには「船越」のような役割を持つ遺跡があるとして、それらを「船越集落」と定義した（宮﨑 2019）。

註 14 小松譲が提唱した『九州西回り沿岸ルート』は、令和 2 年（2020）度の末盧館の企画展『末盧より『西』を望む』で「西九州航路」として紹介され、引用されている（末盧館編 2020）。

【引用・参考文献】

飯盛町教委編 2000『飯盛鬼塚古墳』飯盛町教育委員会

諫早市教委編 2007『諫早市文化財調査年報Ⅰ』諫早市文化財調査報告書第 20 集　諫早市教育委員会

稲富裕和 1995「鉄（くろがね）の武器」『長崎県の考古学』ろうきんブックレット 2　長崎県労働金庫

宇野慎敏 2013「九州島における 4・5 世紀の一様相（1）－肥前（1）－」『つどい』301 号　豊中歴史同好会

雲仙市教委編 2013『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第 12 集　雲仙市教育委員会

大村市教委編 2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol.3』大村市文化財踏査報告書第 25 集　大村市教育委員会

岡崎 敬 1974「長崎県・佐賀県・熊本県における「古鏡」発見地名稿」『九州文化史研究所紀要』通号 19　九州大学九州文化史研究所

岡崎 敬 1976「日本における古鏡発見地名稿 九州Ⅰ」『東アジアより見た日本古代墓制研究』

岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第 67 巻 5 号　史学研究会

岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集　国立歴史民俗博物館

小田富士雄 1979「第 16 章　長崎県高下古墳」『九州考古学研究』古墳時代編　小田富士雄著作集 2　学生社

尾上博一 2005「前方後円墳築造周縁域としての対馬」『西海考古』第 6 号　正林護先生喜寿記念号　西海考古同人会

恩田裕之 2012「古墳時代のお墓」平成 23 年度　やさしい考古学講座資料　（ 公財 ）岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査事務所　https://gikyobun.or.jp/maibun/file/KozaShiryoH23_4.pdf

片岡肇編 1976『岩谷口遺跡群の発掘調査』世知原町教育委員会、財団法人古代学協会

木下尚子 1996『南島貝文化の研究』貝の道の考古学　法政大学出版局

木下尚子 1997「東シナ海の世界にて」『図説 熊本県の歴史』河出書房新社
京都大学平戸学術調査団編 1951『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団
国見町教委編 1959『高下古墳』国見町教育委員会
小松 譲 2013「唐津地域出土の肥後系・島原半島系土器群」『中原遺跡Ⅶ』佐賀県教育委員会
佐世保市教委編 2019『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第 17 集　佐世保市教育委員会
佐世保文化財調査事務所編 2010『門前遺跡Ⅲ・武辺城跡Ⅱ』佐世保文化財調査事務所調査報告第 5 集　長崎県教育委員会
澤宮 優 2008『1000 キロの海を渡った「大王の棺」』現代書館
島原史談会編 1962『島原半島の古代文化－概説と年表』島鉄観光社
下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
下垣仁志 2022『鏡の古墳時代』歴史文化ライブラリー547　吉川弘文館
正林護編 1973『栢ノ木遺跡（中間報告)』松浦市教育委員会
正林護 1989『日本の古代遺跡』長崎　保育社
新幹線文化財調査事務所編 2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集　長崎県教育委員会
杉本欣久 2016「江戸時代における古美術コレクションの一様相－古鏡の収集と出土情報の伝達－」『古文化研究』第 15 号　黒川古文化研究所
外海町教委編 1985『宮田古墳群』外海町文化財調査報告第 3 集　外海町教育委員会
立谷聡明 2022「古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流－西北九州と有明海沿岸地域を中心に－」『西海考古』第 12 号　西海考古同人会
田平町教委編 2003『里田原遺跡』国営再編整備事業にかかる第 37・40・41・44・46 次発掘調査の報告　田平町文化財報告書第 9 集　田平町教育委員会
辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』株式会社 KADOKAWA　角川選書
時津町教委編 1991『前島古墳群』時津町埋蔵文化財調査報告書第 1 集　時津町教育委員会
徳富孔一 2019「古墳年代からみた日韓出土方格 T 字鏡　十二支帯鏡群の型式学」『考古学研究』第 66 巻第 3 号　通巻 263 号　考古学研究会
徳富孔一 2020「安養寺裏山古墳出土方格八鳳鏡と中国製方格 T 字鏡」『遺跡』第 53 号　遺跡発行会
中川潤次 2018「⑨破鏡およびその他の青銅器について」『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 1978「遠目塚遺跡の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第 35 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第 77 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 1989「大屋敷遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅻ　長崎県文化財調査報告書第 94 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 123 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 2002『長崎県埋蔵文化財調査年報 』9 長崎県文化財調査報告書第 164 集〔平成 12 年度調査分〕
長崎県教委編 2006『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書第 190 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 2008『門前遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 第 190 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 2018『立小路遺跡』長崎県文化財調査報告書第 216 集　長崎県教育委員会
長崎市史編さん員会 2013『新長崎市史』第 1 巻　長崎市

長崎市埋文調査協議会 1996『万才町遺跡』－朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－　長崎市埋蔵文化財調査協議会
半田 章 2010「Ⅱ遺構・遺物」『門前遺跡Ⅲ・武辺城跡Ⅱ』佐世保文化財調査事務所調査報告第５集　長崎県教育委員会
東彼杵町教委編 1990『白井川遺跡Ⅱ』東彼杵町文化財調査報告書第４集　東彼杵町教育委員会
東彼杵町教委編 1991『ひさご塚古墳』東彼杵町文化財調査報告書第５集　東彼杵町教育委員会
東彼杵町教委編 1994『ひさご塚古墳（Ⅱ）』東彼杵町文化財調査報告書第６集　東彼杵町教育委員会
平戸市史編纂委員会編 1995『平戸市史』自然・考古編　平戸市
深江町教委編 2006『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第２集　深江町教育委員会
古門雅高 2022「前方後円墳分布周縁地域の社会－長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に－」『西海考古』第 12 号　西海考古同人会
藤田和裕 1994「長崎県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集　共同研究「日本出土鏡データ集成２　国立歴史民俗博物館
末盧館編 2020『末盧より『西』を望む』－西九州航路の盛衰と鉄をめぐる動静－　唐津市末盧館
宮﨑貴夫 2002「長崎県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 97 集　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成　補遺１』国立歴史民俗博物館
宮﨑貴夫編 2019『長崎地域の考古学研究』自費出版
宮下雅史・竹田ゆかり・渡邊康行 2022【資料報告】「長崎市三重地区・東上遺跡について」－五島灘（角力灘）望む弥生時代砂丘遺跡の予察的評価－『西海考古』第 12 号　西海考古同人会
森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第 74 巻６号　史学研究会
脇山佳奈 2015「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学大学院文学研究科　広島大学考古学研究室』第７号

【本文表中の文献一覧】

表１　本県本土部の鏡一覧　文献

No	著者･編者	刊行年	文献	発行
1	田平町教委編	2003	『里田原遺跡』国営再編整備事業にかかる第37･40･41･44･46次発掘調査の報告　田平町文化財報告書第9集	田平町教委
2	京都大学平戸学術調査団	1951	『平戸学術調査』	京都大学平戸学術調査団
3	正林護　編	1973	栢ノ木遺跡（中間報告）	松浦市教委
4	長崎県教委編	2006	『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書 第190集	長崎県教育委員会
5	佐世保文化財調査事務所編	2010	『門前遺跡Ⅲ･武辺城跡Ⅱ』佐世保文化財調査事務所文化財調査事務所調査報告書第5集	長崎県教育委員会
6	東彼杵町教委編	1990	白井川（Ⅱ）　東彼杵町文化財調査報告第4集	東彼杵町教委
7	大村市教委編	2003	『黒丸遺跡ほか発掘調査概要』Vol. 大村市文化財調査報告書 第25集	大村市教育委員
8	長崎県教委編	2018	『立小路遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　長崎県文化財調査報告書第216集	長崎県教育委員会
9	新幹線文化財調査事務所編	2018	『竹松遺跡Ⅲ』 新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集	長崎県教育委員会
10	佐世保市教委編	2019	『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第17集	佐世保市教育委員会
11	東彼杵町教委編	1994	『ひさご塚古墳（Ⅱ）』東彼杵町文化財調査報告書第6集	東彼杵町教育委員会
12	時津町教委編	1991	『前島古墳群』時津町文化財調査報告書第1集	時津町教育委員会
13	岡崎敬　編	1979	『日本における古鏡 発見地名表 九州地方Ⅰ』東アジアより見た日本古代墓制研究（増補改訂版）	
14	岡崎敬　編	1974	長崎県・佐賀県・熊本県における「古鏡」発見地名表稿　九州文化史研究所紀要（通号 19）	九州大学文学部考古学研究室作成
15	諫早市教委編	2007	『諫早市文化財調査年報Ⅰ』諫早市文化財調査報告書第20集	諫早市教育委員会
16	長崎県教委編	1989	「大屋敷跡」長崎県埋蔵文化財調査集報XI	長崎県教育委員会
17	深江町教委編	2006	『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集	深江町教育委員会
18	杉本欣久	2016	「江戸時代における古美術コレクションの一様相－古鏡の収集と出土情報の伝達－」『古文化研究』第15号	黒川古文化研究所
19	長崎県教委編	1978	「遠目塚遺跡の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ　長崎県文化財調査報告書　第35集	長崎県教育委員会
20	長崎県教委編	1985	『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第77集	長崎県教育委員会
21	雲仙市教委編	2013	『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第12集	雲仙市教育委員会
22	国見町教委編	1959	『高下古墳』	国見町教育委員会
23	小田富士雄	1979	第16章　長崎県高下古墳」『九州考古学研究』古墳時代編　小田富士雄著作集2	学生社
24	長崎市史編さん委員会編	2013	『新長崎市史』 第1巻	長崎県教育委員会
25	長崎県教委編	1995	『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集	長崎市
26	外海町教委編	1985	『宮田古墳群』外海町文化財調査報告書第3集	外海町教育委員会
27	片岡肇編	1976	岩谷口遺跡群の発掘調査	世知原町教委、財団法人古代学協会